

ザンギバルの
からゆきさん
娘子軍

白石顯二

冬樹社

ザンバルの
からゆきさん
娘子軍

白石顯二

冬樹社

著者略歴 白石顕二（しらいしけんじ）

1946年，茨城県生まれ。1970年，東京都立大学法学部卒業。1972年以降，アフリカ各地を調査旅行。アフリカ研究者。

現住所 東京都文京区目白台3-21-10

ザンジバルの娘子軍^{からゆきさん} 定価 1200円

1981年3月20日 初版第一刷発行

著者 白石顕二

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町 3-27-6

郵便番号101 振替 東京 8-7757

電話 東京 (03) 264-0346 (代表)

印刷 日本製版株式会社

製本 小高製本工業株式会社

© Kenji Shiraishi 1981 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

0039-10386-5190

ザンジバルの娘子軍 ● 目次

1	夢先案内人	5
2	娘子軍 からゆきさん の航跡	53
3	回想のジャパニーズ・バー	105
4	からゆきさん群像	155
5	おまささんの戦後史	181
6	異境のなかの故郷	213
	あとがき	233
	参考文献	237

菱嶋／平野甲賀

ザン
ジ
バル
の
娘^{からゆきさん}
子^こ
軍

1

夢先案内人

ザンシバルへ。

インド洋のアフリカ大陸東岸にあるサンゴ礁の美しい島。

かつては「象牙と奴隷」の出荷地として、革命時（一九六四年）には「インド洋のキューバ」として知られた反乱の島。

アフリカ大陸から僅か四〇キロメートルの海上にある。島から最も近い対岸の地点は、アフリカ大陸の奴隷貿易史をひもとけば、ココヤシの海岸と、黒人奴隷が大陸と永遠の別れをした「ここに心を置いていけ」とスワヒリ語の意味をもつ地名で有名なバガモヨだ。

バガモヨを離れば、再びアフリカ大陸へは戻れない。インド洋の偏西風に乗ってアラビア半島やアメリカ大陸へ運ばれた奴隷たち。

東アフリカ奴隷貿易の中心地、ザンシバル。「暗黒大陸」探険の出発地、ザンシバル。サルタンの国、ザンシバル。シンドバッドが航海していったというザンシバル。

「世界でもっとも美しい島」ザンシバルに秘められた歴史は、アフリカ・アラブ・アジア・アメリカ史と重なり合って、白い古い家の扉に刻まれたアラベスクのように、人々を闇の奥のなかに

1 夢先案内人

吸い込んでいく。

丁子（クローブ）とココナツの香りが島全体をおおい、熱帯の光にけだるさを感じさせるのは、ザンジバルのもつ魅力のひとつだ。

インド洋の大陸側に沈む太陽は、海の母神に抱かれた赤子のように、無垢で、美しい。

白いサンゴ礁がライトブルーの海に映え、緑におおわれた島とコントラストをつくっている。だれもが、「世界でもっとも美しい島」と認めるにちがいない。ザンジバルの観光案内パンフ

にもそう書かれている。

しかし、その美しさはしばしば過去の醜さを背後に隠してしまうのだ――。

「ザンジバルを訪れる人々は、湾の底を被う『愛らしい白い貝殻』が、ジンのように透明な水を通してはつきり見えることに常に感動していたが、その貝殻は奴隷の骨だった」（D・P・アマニックス）

ザンジバルで奴隷市場が廃止されたのは、十九世紀も後半の一八七三年のことである。しかし、今ではかの奴隷市場の跡には、キリスト教の大聖堂が建てられ、かつての面影はみられない。

港から大陸側の海上に浮ぶ島を指さし、「あの島をみなければザンジバルはわからない」と、ひとりのアフリカ人がつぶやく。そこが黒人奴隷の「集荷」場だったのだ、と。

ザンジバル島は日本の佐渡島のほぼ二倍、沖縄本島の約一・四倍の面積だ。人口は一九六七年で十九万人ほどであり、一世紀前には十万人ぐらいたった。

丁子が主産物のザンジバルの気候は、赤道から少し南に位置し、乾期と雨期の二シーズンである。

年間の平均気温は二十五度をこえ、平均降雨量は一五〇〇ミリメートルに達する。四月と五月が大雨期で、十一月と十二月が小雨期だ。

雨は糸のように流れだし、たちまち土砂降りに変わり、数十分続く。その後には熱帯の太陽が顔をのぞかせる。

砂利道は雨に叩きつけられ、降り終わると各所に水たまりができ、太陽を浴びて白い湯気が立つ。

それも夕方になると、水たまりは消えている。午前十時から十二時までの二時間かっきり、スコールが来ては終わる。

海岸際のコヤシの木も、バオバブの木も、日課となった雨で、乾期の水不足から脱出する。枝は雨にうたれるほどに生気をとりもどし、グリーンの色彩は光を浴びながら、色つやをとります。どす。

白いアラブ風建物の並ぶ街のなかに蜘蛛が糸を引くように、小さな濁流が無数にできる。いずこへ流れるかも分らぬほど、狭い石造りの道は、軒を連ねる家並に沿って、迷路をつくる。

空中から、この街をみるならば、東南を海にかこまれ、海岸沿いの大通りに数世紀の年輪を刻んで白いサンゴの建物が連なり、大通りをはさんで内側には、教会を中心にして、二階建の白い家屋があり、南端にバオバブの木を、西端に市場の建物を配置した迷路の模様、目を見張るだろう。

ザンジバルは、熱帯の午後のけだるさのなかに、太古の昔から生きつづけているかにみえる。

ザンシバルの国立博物館に入る。

アラブ風のドーム形の建物は、まるでモスクだ。毎日五回の礼拝を捧げるイスラム教徒が、かつてはこのモスクに集まっていたにちがいない。

正面の石段を五つ昇り、左側のビクターズブックに氏名を記帳する。一冊の古い皮表紙の記入帳をいちばん前からめくると、二十年前にひとつ飛びだ。

日本人外交官夫妻の氏名が読めた。東欧人とおぼしき名前や、大陸のアフリカ人の名前もみえる。数百人の名前を、すべて昨日迎え入れたように、ビクターズブックは静かに眠っている。

正面から左の角に置かれた展示品に、驚いた。その展示品プレートには、英語でリキシヤと書いてある。

リキシヤ、即ち人力車。

明治三年、和泉大助が発明した「文明開化」時代の乗物は、東シナ海を渡って上海に、南シナ海を渡ってシンガポールへ、インド洋の波頭をこえて、ボンベイへ、そしてアフリカ大陸の南端ケープタウンにまで達している。

リキシヤにのって、娘子軍からゆきさんが海を渡っていった——あの港町、この港町へ、と。

リキシヤの走る港町では、どこでも娘子軍の姿をみることができる。

上海、香港、シンガポール、ボンベイ、タナタブ、ザンシバル、ダーバン——。

東・南シナ海からインド洋にかけての主要な港町には、娘子軍からゆきさんの酒場へ向う人力車が走ってい

く。

そんな白昼夢をみせてくれる、この人力車——。

一九三〇年代末、南アフリカの港町ダーバンにも人力車が走っている。

「岸壁に横付けになった船から降りて、税関構外へ出ると、先ず異様な風態の人力車夫に出会う。鳥の羽根を頭髮に飾り、裸体にグロテスクな模様を描いた『リキシヤ』である。六ペンスもやれば三、四哩は走る」(景山哲夫)

大学教授の見た南アフリカのダーバンの車夫はアフリカ人だ。

車夫がアフリカ人やその土地の人々つまり植民地原住民だったとすれば、人力車の乗客は、港の娼婦か植民地政府の官僚か、外国人旅行者などと想像できよう。

ザンシバル博物館の老学術員は、その人力車の前で、こう説明する。

「このリキシヤは、ザンシバルのイギリス植民地総督が愛用していたものです。ザンシバルにリキシヤが導入されたのは、一九一一年のことで、第二次大戦後まで、いや革命の前年、一九六三年までの約半世紀使われていました。総督府のイギリス人やヨーロッパ人の駐在外交官が、これを一人一台ずつ愛用していたようです。ザンシバルの市街は狭い道幅で、しかも複雑な道が多いので、格好な乗物だったんですね。ザンシバル島の東海岸、つまり、大陸側でないインド洋側に、第二の都市チュワカがあり、ここへ出かけるのに、リキシヤをよく使っていました」

日本では、大分前に廃れてしまった人力車が、つい最近まで使われていたことは興味深い。人力車に自動車が替わった。このザンシバル島もそうだ。だが、街の人々が愛用するのは、中国製

の自転車だ。

若い女性がスカートをひるがえし、自転車にのり、博物館の横の大通りを走り抜けていく。格子窓の博物館から、海がみえる。前庭の芝生には子どもたちが、二匹の大海亀に悪戯している。

午後の時間はすべてがけだるい。

しかし、内陸の首都ダル・エス・サラームほどの暑気は感じられない。午後の数時間を、光を遮断し、風の通路をつくっている白いアラブ風建物のなかですこせば、熱帯の島の暮らしもわるくない。

人々は、朝の八時から午後の二時まで働き、その後、二、三時間、休息し、沐浴をして、服を着替え、夕方、日暮の頃、街のにぎやかな通りや公園へ出ていく。

それが日課であるかのように、歩道には、夜店が出て、またゴザを敷いてはゲームに興じる。ほんの十歳前後の姉妹が、鉄製の洗面器にアジほどの大きさの焼魚を盛って、歩道に座っている。その隣りにはアラブコーヒーを売る屋台もあり、長椅子を二つ置き、小さなカップで客に飲ませる。

歩道の各所では、白い服に帽子をつけたザンシバル人が、物静かに語らいつづける。

賑やかなのは近くの映画館だ。上映は夜だけだから、日が暮れると着飾った人々が館の前に列をつくる。

ザンジバルの市街を気ままに歩いていけばいく種類もの服の色に気がつくだろう。

白い着流しの木綿の服に出会えば、それはイスラム教徒の男性だ。「カンズ」とスワヒリ語でいうこの服は、いちど身にまえば、頭を残してスッポリかぶってしまうので、便利で手離せなくなる。

頭に刺繍の細かく施された白い帽子（コフィア）をのせていれば、敬虔なイスラム教徒であるにちがいない。

白のコフィアとカンズ姿のイスラム教徒の男たちは、アフリカ東海岸地帯ではごく普通にみることができるといえる。

白とくればブラックだ。

黒い服を着ている男はいない。

頭に黒いベールをつけ、黒いドレスを着ているのは、イスラム教徒の女である。イスラム教徒の女性であれば、必ずこの黒いベールで顔を隠し、目だけ出していると想像するが、この島や東アフリカ沿岸では、そこまで厳しくない。頭のベールは、スカーフのような飾りにすらみえてしまう。

一度、パキスタンからの飛行機のなかで、メッカへ向うイスラム教徒の婦人と隣り合わせたことがある。イスラム教徒の婦人は、既婚者の場合、夫以外の男性と口をきかないと聞かされていたが、隣席の婦人は長時間の空の旅の間中、ひと言も話さなかった。

外国語ができないこともあろう。到着地の近くになって、記入しなければならない入国申請カ

ードが、不意に回ってきた。無言で、依頼するかの態度でもなく、隣席の者が記入するのが当然のごとく、パスポートとカードを前につきだした。

記入して戻したとき、黒いベールにおおわれた横顔の表情に、口に出されるであろう感謝の言葉を期待したが、無駄だった。

まるで神秘的な女性だった。同じ年齢ぐらいだとパスポートは教えていた。とても同世代の女性には思えなかった。

そんなことがあって、黒い服の女性をみると、奥ゆかしさよりも、神秘感が先立ってしまう。その沈黙の表情があまりに印象的だったからである。

ところが、この島ときたら、そうしたイスラム女性への先入観をぶち壊す情景をみせつけられるのである。

本土から仕事で滞在中のタンザニア人と、海沿いの敷地を石壁で囲んだスタンレークラブ（バー）へ出かけたときのことである。そのクラブは、かつて白ナイルの源流を探険に出かけたバートンとスピークが準備のために滞在していた古い建物の裏手にある。

海には港に停泊中の船の光が輝き、対岸のバガモヨ方向の洋上には、町の灯りのような火が点滅している。満天の星くずがこぼれ落ちてくるような異郷の夜景を楽しみながら、コップを片手に手酌していた。しばらくすると、二人づれの、黒いベールと服をつけた女性が入ってきた。真すぐ進んでカウンター横のボックスに、友人とみられる男の勧めで座り、ビールを注文した。男たちがカウンターからビールを買ってくると、彼女たちはそのビールのボトルをラッパ飲みしは

じめた。

タンザニアのビール・ボトルは、日本の中ビンのサイズであるから、そんな飲み方はちっとも不自然ではないのだ。

異教徒よりも驚いたのは、本土のタンザニア人だ。

二人の女性は、ラッパ飲みしながら、それをテーブルに置くと、今度は嬌声をあげて、タバコをねだり、口にくわえ、ふかしはじめる。

「あれはなんだ！ あんなイスラム教徒は見たことない」

茫然とした口調で友人がささやいた。彼もザンジバルは初めてだった。初めてみた「イスラム」女性の酒場での態様を、なんと形容すればよいのだろうか。

ザンジバルは、昔はよかった——。かつてそんな風景はみられなかった——。生粋のザンジバル人は、その夜の驚きを語る異邦人にそう答える。

ザンジバルは敬虔なイスラム教徒の支配する島だと、勝手に想像していたわけだ。

「最近、このザンジバルにもデイスコができましたね。土曜日の夜になると大変な賑わいなんですよ」

「イスラム教徒のなかには酒を飲む人もいるし、バーやクラブは多くはないですが、街じゅうに何か所があるんです」

ザンジバル一の歴史あるホテル、ザンジバル・ホテルの屋外バーラウンジでも、黒い服の女たちに会った。その一人に「別のクラブに飲みに行かないか」とさそってみる。軽く断わられた。